

キャラクター名
白崎 遊魅 (しろぎきゆみ)

プレイヤー名

シンドローム	オルクス		ワークス	FHチルドレンC	カヴァー	高校生
	パロール					
オプション			年齢	16	性別	女の子
覚醒	無知	衝動	自傷	初期侵食率	31	%
出自	親戚と疎遠	経験	心の壁	邂逅	同行者	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	25
肉体	0		1			1	行動値	7
感覚	2		0			2	(非装備時)	7
精神	3		0			3	戦闘移動	12
社会	3		0			3	全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃		5	RC	12	8	交渉		
回避	1		知覚			意志	8	1	調達	2	
運転:			芸術:	1		知識:			情報:	FH	1
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
	RC	7r+20				100↓ 12+(腕+2)(停滞2)(魔人4)(要3+未知5)(継続3)

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
思い出の一品	
ホルス神	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
	P	N		
橋沢	P	N		
水橋	P 好奇心	N 憐憫		
イスカ	P 感服	N 脅威		
霞	P だけえ	N 恐怖		
マックス	Pリ、龍!?	N 不安		
ちゆり(スタンド)	P 尽力	N 恐怖		

最大財産P: 10 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
氷熱の軍団	5	10	イニシアチブ	視界	シーン	自動	120	
効果: ラウンド間Lv×4攻撃力上昇シナリオ1回								
時間凍結	1	5	イニシアチブ				80	
効果: イニシアチブ その後ダメージ20失う								
赤方偏移世界	5	2	セット					
効果: 行動値+Lv×2								
コンセ:パロール	2	2	メジャー					
効果: C値-1								
死神の瞳	5	4	メジャー					
効果: 命中したら次のダメージ+Lv+1Dする								
停滞空間	3	2	メジャー				シンド	
効果: 命中したら行動値0 2回								
魔神の心臓	3	4	メジャー				100、シンド	
効果: 命中したらダイス-Lv×3								
魔王の腕	1	2	メジャー				シンドローム	
効果: 命中で硬直を与える								
縛鎖の空間	3	3	メジャー					
効果: 命中で放心と重圧 3回								
拘束する大地	5	3	メジャー	視界				
効果: 命中でそのラウンドの間対象ダイス-Lv+2個する								
アニマルテイマー	3	3	メジャー				シンド	
効果: ダイスLv+1個								
悪魔の影	1	5	メジャー				80	
効果: 命中で次はリアクション不可								
要の陣形	3	3	メジャー				シンド	
効果: 対象を3体にする 1回								

PL:てんそく
生まれたすぐに私の両親は息を引き取った、まだ物心もつかない生まれたての赤子だった私があることを知ったのは小学生の時だった。両親が亡くなった私を最初に引き取ったのは、母方の親戚だった。だけど、その親戚の人は私に優しくしてくれることはなかった。それどころか暴言を吐かれ殴られるのもよくあることだった。それは、その親戚の人はひどく私を嫌っていたからだった。私を身ごもった時から母は病気を頻りに起こすようになってしまった。出産が近づいた時にひどくなっていったらしく、それが私のせいだと、疫病神だとして嫌っていたのだと聞かされた。それを聞いた私はそこにいるのが辛くなり友達の家を訪ねそちらに引き取ってもらうことにした。友達の家の人には快く迎えてくれたが、暴力を振るわれていた私はどこか距離を保とうとしていた。とある夜、そうやって他人とに間に壁を造っていた私に話しかけてくる声があった。見た目は同じ年ぐらいの女の子だった、全く知らない子だけどもなぜか他人とは思えない感じがする子だった。それ以降、夜になるたびにその子と会うようになっていた。その時だけは壁とか関係なくその日あった出来事とか楽しく話せていた。いつしか会いたいと思うときに会えるくらいまでに親しくなっていた。…でも、そんな私を友人たちは避けた。

「あなたは何を言っているの…誰と話しているの……そこに誰がいるの…？」っと、

私を見るその目はだんだんと気持ちわるいものを見るような目になっていった。その目に耐えられなくなった私は、その家を飛び出た。いつから使えたのかも覚えていないけど、空間に部屋を作る能力を使って誰にも見つからないようにひっそりの暮らすようになっていた。そんな時でもあの女の子はついてきてくれた。

逃げるような生活をしていた時に私に声をかけたのがFHの誰かだった。その時に一緒にいる女の子が私のスタンドというものだとか聞かされた。

